

北島詩

追憶

蠟燭の明りが
どの顔にもゆらめいて
その跡をとどめない
影の波しぶきが
雪のように白い壁を軽く打つ
壁に掛けられた琴が
暗闇の中で音を立てる
あたかも水に映え入るマストの灯が
ひそやかにことばを交すように

われらの朝の太陽

小さな草の柔かい腕が太陽を支え
異なる皮膚の色をした人々がきみへ向かう
そして光の束となり、きみは鐘を打ち鳴らすように
山頂の雪を震いおとす

ふるえる恐れと憂いをしわが深々とうながし
思いはもはや幕のうしろに身をひかない
書物が窓をあけ、鳥の群れを自由に旋回させる
老木はいびきをやめ、もはや枯れた藤で
子供らのあのすばしこい足にまつわりつきはしない
乙女らは沐浴から帰り来る
星と果てしない月の光を曳きよせて

誰もがもっている
自分の名前を
自分の声と愛と願いとを

悪夢に聳える氷山は
明け方に融けて消え、残された夜色の中を
人々はおのれの影をつれてゆく
重たい記憶は
歩む足どりの中にしだいに消えゆかせ

腕と腕とを連ねた地平線に
どの物語も新しく始まる
さあ語り始めるがよい

ミカン熟せり

ミカン熟せり
陽光を実ひとつに詰めてミカン熟せり

きみの心に歩み入らせよ
重たき愛をたずさえて

ミカン熟せり
細かな水煙を表皮に噴き上げて

きみの心に歩み入らせよ
憂いを歎びと化す源へ

ミカン熟せり

どの実にもからまる苦き思いの糸

きみの心に歩み入らせよ

ついでた夢を探し求めて

ミカン熟せり

陽光を笑ひとつに詰めてミカン熟せり

冬を過ごす

めざめれば、北方の松林——

大地がせわしなく打ち鳴らす太鼓の音

木々の幹に宿る陽の光の強い酒が

闇の氷を揺らして

心は狼の群れの遠吠えとわたりあい声をあげる

風が盗み去るのは風

冬は大雪の債務のために

その隠喩よりも大きなものとなる

郷愁は亡国の君主さながら

探し求めるのは永遠の迷い、失われしもの

海が生者のために死を悲しみ

星はかわるがわる愛情を明るく照らす——

誰が変幻するパノラマの証人なのか

角笛を待ち望む河

果樹園の暴動

聞こえるかい、わたしの愛しい妻よ
手に手をとって老いを迎え
ことば
語とともに冬眠しよう
交錯する時の光が解けない結び目
あるいは未完の詩を留めるだろう

出典：『北島（ペイタオ）詩集』（是永駿編・訳、書肆山田、2009年）